

日本語の「～したことがある。」について

武村朝吉

要約

中国語における「経験」の捉えられ方に関する“マクロ仮説”を日本語の「～したことがある。」に適用することによって、これまで解明されていなかった「～したことがある。」についての多くの事実を明らかにした。

1.0. はじめに

筆者は武村2014年¹で、中国語の「完了」と「経験」の意味を表すとされる動態助詞“過”の先行研究を検証し、“過”が「経験」を捉える視点は“マクロ的視点”であるとする仮説（以下“マクロ仮説”）を提示した。本稿ではその“マクロ仮説”を用いて、中国語の“過”と共通点が多いと思われる、日本語の「経験」の表現形式である「～したことがある。」について論じる。

1.1. “マクロ仮説”の要約²

“マクロ仮説”とは、「経験」が“マクロ的視点”で捉えられているという事実を根本的な着眼点とし、そこから派生する、事態時や事態の特質等、マクロ的な事態の捉え方に関連した一連の新しい考え方・見方である。

「経験」は“マクロ的視点”によって捉えられるため、事態時も、事態の捉え方も、事態の特質も、全てがマクロ的になる。

「経験」を捉える“マクロ的視点”は、参照時を発話時に置き、発話時から時間軸上遠く離れた過去の比較的広い時間帯を切り取り、その“マクロ時間断片”を事態時とする。“マクロ的視点”は“マクロ時間断片（＝事態時）”上における「経験（＝事態）」の「有無」を、端的に“点”として捉える。この事態を捉える過程は以下のような極めて特異な特徴を持っていると考えられる。

- ◇ 「経験（＝事態）」の「有無」を、端的に“点”として捉えるため、事態の継続はなく、発話時の状況との間に断絶を生じ、事態は“不連続性”という特性を持ったものとなる。
- ◇ 「経験（＝事態）」として捉えられる動作の完了も、動作の完了の結果として現れる状態も、状態の存在も、形容詞が表す状態の存在も、圧縮され、全てが

切り取られた断片上の“点”として認識される。

- ◇ 「経験」に言及する際「完了」はその前提条件であって、焦点の当てられる核心は、“点”として認識される完了した動作、動作の完了によって現れた状態、あるいは存在した状態の「有無」である。
- ◇ 「経験」は、事態の“不連続性”のため、参照時の状況と関連付けるということは不可能である。そのことは「経験」が「パーフェクト」とは異なった範疇であるということを裏付けている。「パーフェクト」が参照時との“直接的な”関連付けであるとするなら、「経験」は参照時との“間接的”な関連付けであると言えよう。
- ◇ 「経験」として捉えられる過去の事象は、事態の“不連続性”のため“可変性”と“反復性”を持った事象に限られる。
- ◇ 「経験」として捉えられる過去の事象の生起する回数は1回以上である。

1.2. 「経験」とは何か

広辞苑を引いてみると、「経験」の哲学的な定義は「感覚・知覚から始まって、道徳的行為や知的活動までを含む体験の自覚されたもの。」となっている。その定義された範疇は極めて広く、「～したことがある。」が捉える「経験」とは必ずしも符合しない。普段、私たちは「経験」は「～したことがある。」で表され、逆に「～したことがある。」と表されるものが「経験」であると思いがちである。しかし、日記に記された日々の体験・経験も、紀行文に綴られた旅先での印象深い体験・経験も、純然たる「経験」でありながら「～したことがある。」が用いられることはなく、その殆どが過去時制で表されている。

1. 3. 日本語における「経験」の表現形式

日本語において「経験」の意味を表す表現形式は、「～したことがある。」と「～している。」の2つがよく知られている³。それと併せて、1.2.で言及したように、実際は「経験」の殆どが過去時制によって表されていることを考慮すると、日本語の「経験」の表され方は図1のようになる。

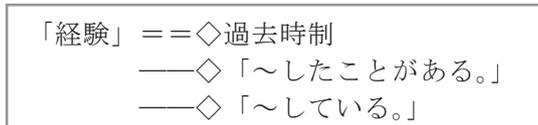


図1 日本語の「経験」の表現形式

本稿においては、これら三つの「経験」の表現形式の内、中国語の“過”と共通点が多いと思われる、「～したことがある。」について論じたいと思う。

1. 4. “マクロ仮説”による「～したことがある。」の理解

「経験」の意味概念が言語の種別を越えて共通したものであると考えられることと、日本語の「～したことがある。」が中国語の「経験」を捉える動態助詞“過”と多くの共通点を持つということ、これら二つの理由から、1.1.の“マクロ仮説”による「～したことがある。」の説明を試みたいと思う。

「～したことがある。」が「経験」を捉える視点は“マクロ的視点”であるとするならば、「～したことがある。」が「経験」を捉える際に関連する一連の事柄は、自動的に“マクロ仮説”の内容と同一のものとなる。その時点で、「～したことがある。」についての理解は完結することになるが、本稿においては、その理解が先行研究の提示する考え方とどう違うのか、あるいはその理解によって諸事例に対しどのようなより合理的な説明が可能となるかについて論じたいと思う。

1. 5. 「～したことがある。」と「過去時制」と「パーフェクト」の差異

本論に入る前に、「～したことがある。」と「過去時制」と「パーフェクト」、これら三者の差異を見ておきたいと思う。なお、図2,3,4中のET, ST, RTは、それぞれEvent Time (事態時), Speech Time (発話時), Reference Time (参照時) のことである。

□ 「～したことがある。」

「～したことがある。」における「経験」の捉えられ方は、1.4.で既述のように、1.1.の“マクロ仮説”の要約どおりであるが、ここでは、特徴的な部分のみを再確認する。図2のように、「～したことがある。」は参照時を発話時に置き、“マクロ視点”で、“マクロ時間断片”上の事態の存在の「有無」を端的に“点”的に捉える。そのため、発話時から時間軸上遠く離れたところに位置する事態時は相当曖昧なものから、ひいてはなくなる場合もあると考えられる。また、捉えられる事態あるいは事態の結果は断絶し、不連続性を示す。その結果、パーフェクトのような発話時との関連付けはなく、発話時まで残されるものは、嘗て特定の事態を経たという経験のみである、と考えられる。

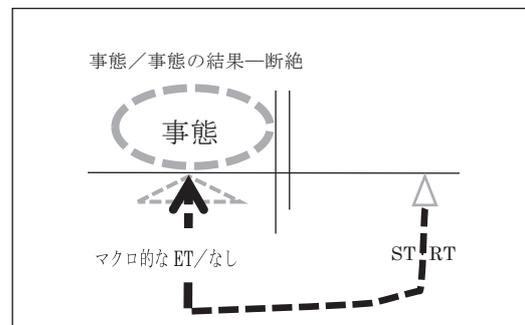


図2 「～したことがある。」

□ 「過去時制」と「～したことがある。」との差異

過去時制は、参照時を事態時において事態を捉えると説明されている⁴。その視点は、まさに事態が生起している事態時に置かれているのであるから、事態時からピーポイントで事態を捉える、ミクロ的な捉え方であると言える。また、参照時が発話時に置かれられないということは、発話時から独立した形で事態が捉えられているということであり、参照時が置かれる事態時は発話時との関連性による制限を受けず、時間軸上の時間距離が近いものから遠いものまで広範囲に亘って可能であるということを示している。

このような過去時制の特徴を踏まえると、「～したことがある。」と過去時制との顕著な差異は、参照時の置かれる位置と事態時の性質の差異にあることが分かる。すなわち、一方の「～したことがある。」が参照時を発話時に置き、発話時から時間軸上遠く離れた比較的間断片の広い“マクロ時間断片”を事態時とするのに対し、他方の過去時制は、参照時を事態時に置

き、極めて時間幅の狭いミクロ的な時点于事態時としていているという差異である。

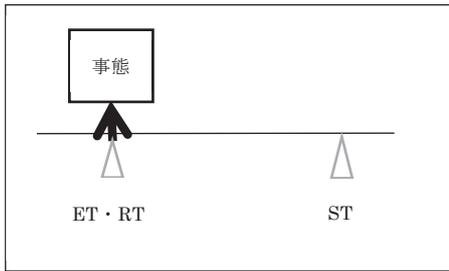


図3 過去時制

□ 「パーフェクト」と「～したことがある。」の差異

パーフェクトは参照時を発話時に置き、発話時と関連づけられた形で事態を捉えるものと理解されている⁵。事態が発話時と関連づけられるということの含意は、事態あるいは事態の結果が継続し発話時に何らかの影響を残すということであると理解できる。通常、事態あるいは事態の結果は、事態発生からの経過時間に反比例して希薄化していくというのが自然な変化であるから、事態あるいは事態の結果が発話時に何らかの影響を残すためには、未だ希薄化されていない事態あるいは事態の結果が残存している状況が必要であり、そのためには事態時は発話時から時間軸上比較的近距离にあるということになる。このように見ていくと、パーフェクトと「～したことがある。」の顕著な差異は、発話時から事態時までの距離がパーフェクトの場合は近いのに対し、「～したことがある。」は遠いということと、事態あるいは事態の結果がパーフェクトの場合は発話時に至るのに対し、「～したことがある。」は発話時に至らないということ、この二点であると理解される。

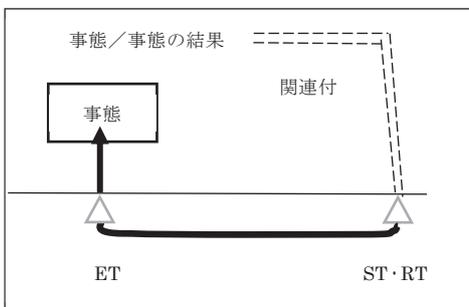


図4 パーフェクト

1. 6. 「～したことがある。」についての先行研究

「～したことがある。」についての研究は極めて少ない。その中で、工藤1989⁶（以下「工藤89」）と池

田1996⁷（以下「池田96」）が、「～したことがある。」について論じている。工藤89は「～したことがある。」をパーフェクトと見なし、5つの特徴を提示している。池田96は、それら5つの特徴を批判的に検証しつつ、「～したことがある。」についてより踏み込んだ議論を展開している。両者の議論は広範囲に及ぶものではあるが、これまで中国語の“過”について見てきた筆者からすると、未だ見解の統合に成功していない部分を残しているように感じさせられる。本稿においては、これら両者の見解に“マクロ仮説”を加えることによって、より合理的な見解を見出したいと思う。

1. 7. 工藤89と池田96の議論

まず、工藤89が提示した「～したことがある。」の特徴は以下の5つである⁸。

- ① 基本的に、個別的＝具体的な出来事としてではなく一般的な出来事として差し出す。
- ② 発話時とかなり隔たった出来事しか表せない。この時間的隔たりは話しての主観に任されることも多い。
- ③ 発話時において、直接的結果が現存している場合には使えない。ただ発話時までに出てきた出来事がおこったかどうかを問題とする。
- ④ 主語が〈ハ〉の場合は、永続しないもとにもどりうる結果をとらえる動詞に制限される。
- ⑤ 運動動詞以外でも経験を表すことができる。

そして、これら「～したことがある。」の5つの特徴に対し、池田96が展開した議論は次のとおりある。

- ①⇒まず何が個別的＝具体的か、何が一般的かがまったく説明されていない。「狩野さん、伊達さんと差向いで酒を飲んだことがある？」ように例文を変えても何ら問題のない文が得られるが、略…。
- ②⇒たしかに発話時とかなり隔たった出来事をあらわすように思われるが、…略…この隔たりは話し手の主観によるところが大きいので、説明としては不十分ではないだろうか。
- ③⇒たとえば、「彼は2年前に胃潰瘍で胃を3分の2切ったことがある。今は残りの3分の1の胃ですっかり元気だ」というような場合、直接的結果が現存しているがまったく問題はない。
- ④⇒「Xは～シタコトガアル」では、あくまでも「X」

は経験主であるのに対して、「Xガ～シタコトガアル」では、「X」は出来事の主体であって、経験主ではない。

⑤⇒動詞述語文に限らず、「彼はわけもなく嬉しかったことがある」「彼女は幼稚園の先生だったことがある」といった形容詞述語文、名詞述語文でも経験を表すことができる。

2. 1. 「～したことがある。」の時間基盤

中国語の場合、「完了」と「経験」の意味を表すとされる動態助詞“過”は、“マクロ時間断片”の時間基盤として、“現在を起点とする広義の過去（以下“広義の過去”）」と、“過去のある時点を起点とする狭義の過去（以下“狭義の過去”）」と、発話時から時間軸上近い“最近の過去”の3種類を持ち、その内、“広義の過去”と“最近の過去”の2つが「経験」の表現に関与している。

日本語の「～したことがある。」の場合のどうか。次節で、「～したことがある。」の事態時の特性を検証することで確認してみたいと思う。

2. 2. 「～したことがある。」の“マクロ時間断片（＝事態時）”

例えば（1）の〔事態時〕について考察してみたいと思う。

（1）〔事態時〕私はアメリカに行ったことがある。

〔 〕内に入る事態時について、工藤89は「②発話時とかなり隔たった出来事しか表せない。この時間的隔たりは話しての主観に任されることも多い。…」とし、池田96は「たしかに発話時とかなり隔たった出来事をあらわすように思われるが、…略…この隔たりは話し手の主観によるところが大きいので、説明としては不十分ではないだろうか。」と批評している。両者の見解は、筆者の“マクロ仮説”から見ると、“マクロ時間断片”の構成要素の一つを指摘しているものの、より重要な、広い時間幅を有しているという構成要素への言及がない。また、両者の言う「時間的隔たりは話し手の主観に任されている」という見解も、その実、「経験」という意味概念が持つ時間基盤と「～したことがある。」が持つ時間基盤にズレがあること（2.3.参照）が考慮されていないことからくる曖昧さであろうと思われる。

発話時からの時間距離と事態時の時間幅の組み合わせを、マクロ的なものからミクロ的なものへと変えたものを複数個試し、不自然さを感じさせる状況がどのようなものであるか、概括すると以下ようになる。

- i. マクロ的事態時（＝発話時から遠く、時間幅が広い）：〔事態時無し〕、〔昔〕、〔子供の頃〕
- ii. ややミクロ的な事態時（＝発話時から時間距離がやや近く、時間幅もやや狭い）：〔1年前〕〔千月〕〔先週〕
- iii. ミクロ的な事態時（＝時間幅が狭い）：〔1995年1月15日〕〔1年前の3月15日〕〔先月の20日〕〔先週の土曜日〕

上記の概括から次のことが推測できる。iのように、“マクロ時間断片”の構成要素としては、発話時からの距離が遠いことと、時間幅が広いこと、この2点が重要である。逆にiiiのように、時間幅の狭さが“マクロ時間断片”の構成を阻害する要因となっている。

例えば、iiiの〔1995年1月15日〕は、時間距離は遠いものの時間幅が極端に狭くミクロ的であることが“マクロ時間断片”の構成要件を満たさず、非文となっていることが分かる。実はこれが、2.4.節で後述する、経歴が純然たる「経験」でありながら「～したことがある。」で表記されない理由であることも分かってくる。iiの〔1年前〕〔半年前〕〔先月〕は、時間距離もやや広く時間距離も遠いように感じられるものの、“マクロ時間断片”を構成する必要条件を満たすには未だ不十分で、非文と判断されるのだと理解できる。

2. 3. 「～したことがある。」の“マクロ時間断片（＝事態時）”の拡張

ここで2.1.の「（1）〔事態時〕私はアメリカに行ったことがある。」を別の角度から検証してみたいと思う。2.1.では単独の平叙文として取り出したが、今度は（2）のような対話の事例として考察してみたいと思う。

（2） A：「アメリカに行ったことありますか？」

B：「はい。先週出張で行ってきたばかりです。」

AとBが「経験」を話題にして対話を行う時、両者が感じている「経験」の事態時は平叙文の場合のそれとは異なったものとなっている。本来発話時から遠く離れた“マクロ時間断片”を事態時とするはずの「経験」の時間幅が時間軸上右向きに、発話直前まで拡張されたものになっていると感じられるのである。Aも「発話直前まで」を時間基盤とし、その質問に対して応答する

Bが理解する事態時もまた「発話直前まで」拡張されたものである。故に、「先週」が“マクロ時間断片”を構成する必要条件を満たさず、もはや「～したことがある。」で応答することが不可能であっても、「はい。」と返答する。

2.2と2.3で「～したことがある。」によって表される内容と、「経験」という意味概念について検証してきたように、日本語の場合も、“広義の過去”と“狭義の過去”の2つが「経験」に関与していることが分かる。つまり、「～したことがある。」は“狭義の過去”を、「経験」という意味概念は“広義の過去”を時間基盤としているということである。

2.4. 「～したことがある。」で表現できない「経験」

下の(3)(4)は純然たる「経験」であるにも関わらず、「～したことがある。」で表現すると非文と判断されてしまう。なぜか。その原因はどこにあるのか。

(3) *1995年東京大学を卒業したことがある。(経歴)

(4) *昨日久しぶりに同郷の田中太郎に会ったことがある。(日記)

(3)(4)は特定個人にとっての経歴と日記に出てきそうな前日経験した出来事を「～したことがある。」で表現したものである。(3)(4)の「大学を卒業した。」と「同郷の山田太郎にあった。」は、間違いなくどれも特定個人の「経験」として認知されるものであるが、非文と判断されてしまう。その理由は、2.1で見たように、(3)は発話時からの時間距離は遠いものの時間幅が極端に狭くミクロ的で、「～したことがある。」の“マクロ時間断片”の構成要件を満たさないことが、非文とされる原因である。(4)は、時間距離の近さも時間幅の狭さも極めてミクロ的であるため、“マクロ時間断片”を構成する必要条件を満たさないことが、非文とされる原因である。このように、両者が純然たる「経験」でありながら「～したことがある。」に馴染まない具体的な原因は、発話時からの時間距離が近過ぎること、または“マクロ時間断片”の時間幅が狭すぎることにありと特定できる。逆の言い方をすれば、(3)(4)はどちらも事態時の時間幅が狭く、その狭い時間幅の事態時に立ってピーポイントで事態を捉える過去時制としての要件を満たしていることが伺える。

3.1. 「～したことがある。」が捉える事態の不連続性

1.1.並びに1.4, 1.5.で見たように、「～したことがあ

る。」で捉える事態は不連続性という特性を持つ。実は、この事態の不連続性という特性が、「～したことがある。」の使用要件や、事態の成立要件等、関連する別の特性をも生み出しているのだということが分かってくる。以下に、見ていきたいと思う。

3.2. 事態あるいは事態の結果の継続について

工藤89が「③発話時において、直接的結果が現存している場合には使えない。ただし、発話時までに出てくる出来事が起こったかどうかどうかを問題にする。」としているのに対し、池田96は次の事例を挙げ、「直接的結果が現存しているがまったく問題がない。…」と反論している。

・彼は2年前に胃潰瘍で胃を3分の2切ったことがある。今は残りの3分の1ですっかり元気だ。」

事例中の「彼」と「胃」は、数学の集合の概念で捉えると、「胃」は「彼」の真部分集合(小主語と大主語)の関係であり、両者は位相を異にしている。事態あるいは事態の結果の継続の有無を議論する際、位相を整えて比較すると、事態あるいは事態の結果の継続の有無ははっきりしてくる。

ア. 彼は「2年前胃潰瘍で胃を3分の2切った(=重症だった)」ことがある。

⇨今は残りの3分の1ですっかり元気だ。[事態の継続はない]

イ. (胃は)2年前胃潰瘍で3分の2切った(=切られた)。

⇒今は残りの3分の1…(事態の直接的結果が現存している)

このように見てくると、アは事態の継続はないので「～したことがある。」が使える、イは事態の結果の継続があるため「～したことがある。」が使えないということになる。

3.3. 事態あるいは事態の結果の継続と、事態の反復性について

前節で見たように、「～したことがある。」を用いるためには、事態の不連続性が担保されることが使用要件となる。そのことは先行研究においても指摘されているが、事態の反復性が現れた場合については説明がない。例えば(5)は事態が継続しているように見える事例であるが、「～したことがある。」の使用が可能である。

(5) 彼は10年前と3年前にも胃潰瘍を発症したことがあり、今回は3度目である。

胃潰瘍の状況にあるという発話時（現在）の事態は、一見、過去の「胃潰瘍を発症したことがあり、」という事態が継続しているようにも見える。しかし、「～したことがある。」の事態は反復性をも有しているので、事態が複数回生起している場合は、発話時の事態とどのような関係性を持つのかという点も考慮する必要がある。重要なことは、複数個ある「経験」の内の直近の過去の事態あるいは事態の結果が完結・断絶し、発話時においては不連続性が担保されているという意味なのだと分かる。(5)においては、「今回は3度目」という表現から、直近の3年前に発症した胃潰瘍の状況は既に完結し、現在の状況はそれとは別の状況として捉えられている、と理解できる。

なお、この反復性のため、「～したことがある。」が捉える事態は、往々にして複数回生起している場合が少なくないと考えられる。このことが、「～したことがある。」が捉える事象を、一見、個別的なものではなく一般的な出来事であると感じさせる所以となっているのではないかと推測される(1.7.①参照)。

3.4. 「～したことがある。」の事態の不連続性と、動詞の種別、並びに「経験主」という考え方について

「～したことがある。」で捉えられる事態が不連続性を有するという事実は、遡れば当然のこととして、そのような事態の生起に関する動詞も限られてくることを意味する。つまり、継続してしまうような事態あるいは事態の結果を生起させる動詞は使用できないということである。具体的に言えば、動詞は反復性や可変性を有するものに限られ、事態の結果が永続してしまうような瞬間動詞等は使用できないということである。しかし、常に使用不可なのではなく使用が可能な場合が出てくるとというのが先行研究の議論である。以下に、その議論について考察してみたいと思う。

工藤89は「④主語が<ハ>の場合、永続しない元にもどりうる結果を捉える動詞に制限される。」と指摘し、以下2つの事例を挙げている。

- ・川端康成は1979年に {死んでいる / *死んだことがある}。
- ・ここで子どもが二人 {死んでいる / 死んだことがあ

る}。

上掲の2つの事例が非文あるいは正文と判断される理由は次のように説明できる。

*川端康成は1979年に死んだことがある。〔事態「川端康成は死んだ」の結果が継続し、不連続性が担保されない→「～したことがある。」に馴染まない(=非文)。〕。

・ここで子どもが二人死んだことがある。〔事態「子どもが二人死んだ」の継続(痕跡)がなく、不連続性が担保される→「～したことがある。」の表現に馴染む(=正文)。〕

以上のように一応の説明はつくが、“死ぬ”という同一の動詞がなぜ一方では使え他方では使えないのか、より深い疑問が残されてしまっている。そこで、池田96の言及する「経験主」について、考察してみたいと思う。

「経験主」とは当然「経験の主体」である。視点を変えて、「経験」の所在という考え方からすれば、「経験」は「経験主」の記憶の中に存在するのであるから、「経験主」がすなわち「経験の所在」で、両者は同義ということになる。この論理を逆にすると、「[場所]で」～したことがある。」のように副詞句によって「経験」が生起した場所が表される場合、当然その場所が「経験の所在」であり、かつ「経験主」でもあるということになる。上の事例「ここで子どもが二人死んでいる。」の場合、「経験主」は死んだ二人の子供のみであるが、「経験の所在」としては「二人の子ども」と「ここ」が考えられる。「二人の子ども」が「二人の子どもが死んだ」を経験した「経験主」というのも論理的におかしく、死んでいなくなった二人の子どもが「経験の所在」というのも不自然なことであり、結局、残された「ここ」が「経験の所在」=「経験主」だということになる。そもそも、「ここ」で生起する出来事は「ここ」に包含され、両者は大主語と小主語という関係にあるから、その「経験の所在」は大主語に帰属するのだとも理解できる。

3.5. 「～したことがある。」の事態と成り得る「存在」や「状態」

「～したことがある。」は連体修飾語部分の「～した」が形式名詞「こと」を修飾する構造となっている。そのことから、「～したことがある。」の事態(「経験」)は名詞化、すなわち既成事実化され、その存在の「有

無」が“点”として捉えられている、と言える。表現を変えると、“マクロ的視点”の焦点は、事態を出現させる動作・行為の完了ではなく、事態の存在の「有無」に当てられている、となる。つまり、事態を出現させる動作・行為の完了は、「～したことがある」が事態（「経験」）を捉える必要条件ではなく、その前提条件に過ぎない、ということである。従って、同じように既成事実として、その存在の「有無」に焦点が当てられるものであれば、「存在」であっても、「状態」であっても、以下の事例のように、「～したことがある。」の事態と成り得ると考えられる。

- ・彼は少年院にいたことがある。(状態性動詞「いる」→存在)
- ・この商店街は嘗て非常に賑やかだったことがある。(形容動詞「賑やかな」→状態)

3.6. 「～したことがある。」が捉える事態は非日常的なものか？

「～したことがある。」が捉える事態は、事態の不連続性のため、発話時においてはもはやその事態の継続はない。発話時から見ると、「～したことがある。」が捉える事態は、発話の状況とは異なったものである。もし、発話者が発話時の状況を日常的なものと認識するとしたら、それと異なった状況にある「～したことがある。」が捉える事態は、非日常的なものと認識されるように感じられる。しかし、厳密に言えば、重要なことは事態の不連続性が担保されることであり、非日常性が担保されることではない。なぜなら、例えば非日常的な「死んだ」は事態の結果が永続し不連続性が担保されないように、「～したことがある。」が捉える事態の非日常性が事態の不連続性が担保されることにつながる訳ではないからだ。

実際のところ、「～したことがある。」の事態と成り得る事象は、以下のように、非日常的で稀有なものから殆どの人が経験する日常的なものまで多岐に亘っている。

「南極に行ったことがある。」「アマゾン川で泳いだことがある。」「麻疹に罹ったことがある。」……「小さなミスを犯したことがある。」「両親から叱られたことがある。」「寂しいと感じたことがある。」「嬉しいと感じたことがある。」「楽しいと感じたことがある。」

これら「～したことがある。」の事態と成り得る事

象が持つ特徴を一言で概括すると、「全ての人々が経験すること以外の事柄」ということになる。結局、9割の人々が経験するようなことでも「～したことがある。」による表現が可能だということである。例えば、前述の「楽しいと感じたことがある。」「忘れ物をしたことがある。」等々。従って、非日常的な事柄に限られるという理解は正しくないということになる。

一方、「全ての人々が経験すること」は「～したことがある。」を用いることができない。次のような事例がそれにあたる。「*風邪が治ったことがある。」「*食事をしたことがある。」「*眠ったことがある。」等々。しかし、無論、これらの事例も発生頻度を下げる語句を挿入すると、全ての人々が経験する範疇から外れるので、次のように正文となる。「1日で風邪が治ったことがある。」「3分で食事したことがある。」「座ったまま眠ったことがある。」等々。

最後に

「～したことがある。」については、一定の研究成果が出せたように思う。今後も先行研究に学びつつ、日本語の、そして中国語のアスペクトの研究を精力的に行っていきたいと思う。

¹ 武村朝吉 「中国語の“過2”について」2014 沖縄キリスト教学院大学『論集』p.36

² 本稿で用いる“事態時(Situation Time)”, “参照時(Reference Time)”, “発話時(Speech Time)”は劉綺紋著 『中国語のアスペクトとモダリティ』2006 p.25に習ったものである。

³ 藤井正 「動詞+ている」の意味 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』S51 p.105

⁴ 柏野健次著 『テンスとアスペクトの語法』1999 p.21

⁵ 柏野健次著 『テンスとアスペクトの語法』1999 p.157

⁶ 工藤真由美 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『ことばの科学3』1989むぎ書房

⁷ 池田英喜 「経験をあらわす『シタコトガアル』について」『待兼山論叢. 日本学篇』1996 pp.11~26

⁸ 丸囲いの数字①～⑤は池田英喜(1996)による。

参考文献

- 池田英喜 「経験をあらわす『シタコトガアル』について」『待兼山論叢 日本学篇』1996 大阪大学大学院文学研究科
- 工藤真由美 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『ことばの科学3』1989むぎ書房
- 武村朝吉 「中国語の“過2”について」2014 沖縄キリスト教学院大学『論集』沖縄キリスト教学院大学
- 劉綺紋著 『中国語のアスペクトとモダリティ』2006 大阪大学出版会
- 藤井正 「動詞+ている」の意味」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』1976 むぎ書房
- 柏野健次著 『テンスとアスペクトの語法』1999 開拓社

A study on Japanese on “…shita koto ga aru.”

Tomoyoshi Takemura

Abstract

This paper presents analysis of a hypothesis for “macroscopic viewpoint” (which embodies experience) as understood in Chinese grammar and applies it to Japanese phrase form “shita koto ga aru.” Application of this hypothesis to Japanese has produced many, hitherto, unknown facts about how experience is expressed in the language.